

平成25年度第2回伊勢志摩高等学校活性化推進協議会

日 時 平成25年10月3日(木) 18:30～21:00

場 所 三重県伊勢庁舎 401会議室

出席者 (委員) 松本 金矢 亀谷 章 清水 清嗣 太田 光治 山北 佳宏
宮崎 吉博 斎藤 陽二 前田 藤彦 藤田 心作 仲 立治
中北 隆也 浅井 清 奥村 典保 森井 務 上村 昌史
小川 晴弘 森井 裕 山岡 幸雄 谷口 三津夫 池田 久
○代理出席 山本 充 (中西委員代理) (敬称略)

(事務局) 高校教育課課長 倉田 裕司 教育改革推進監 加藤 幸弘
教育総務課班長 辻 成尚 教育総務課主幹 久野 嘉也
教育総務課主査 宇陀 和彦 教育総務課主査 西 達夫

開 会

○事務局

定刻となりましたので、平成25年度第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会を始めます。

本日の配付資料ですが、事前に送付させていただいたものと基本的には同じですが、事項書が表紙のステイプラー留め資料が1部です。

事前に送付させていただいたものとは、8ページ資料5の平成24年度卒業生の進路という表の表示形式を少し変えさせていただきました。ご確認をよろしくお願いします。

また、本日も当協議会は公開にて行っております。広い会場を使用しておりますので、ご発言はすべてマイクを通していただきますようにご協力をお願いします。

それでは、開催にあたり、県教育委員会事務局教育改革推進監の加藤幸弘からご挨拶申し上げます。

1 挨拶

○加藤教育改革推進監 (事務局)

第2回協議会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。県教育委員会事務局を代表いたしましてご挨拶申し上げます。

8月29日に開催させていただきました第1回協議会におきましては、昨年度末の協議のまとめを踏まえながら、今年度の協議の進め方や、この地域の県立高校を取り巻く状況と今後の活性化についてご意見を頂戴しました。

今回は、前回の協議を踏まえながら、当地域の県立高校の特色化・魅力化と平成28年度

以降の適正規模・適正配置について、ご検討いただくものと考えております。

本日の協議をもとに、今月末以降ですが、専門学科と鳥羽・志摩・度会地域の2つのワーキング会議を、それぞれ2回開催させていただくこととしております。本日は、そのワーキング会議で各学校に関しまして、より詳細な検討を進めるためのベースとなっていくご意見を頂戴するものと認識させていただいております。

なお、今回は、前回のご意見も踏まえまして、午後6時半という少し早い時間からの開催とさせていただきます。お忙しい中、駆けつけていただいた委員の方もありがとうございます。午後9時までという時間の中ですが、当地域の高校生が今後も生き生きと学ぶ環境を整えていくということで、建設的なご意見を頂戴できればと存じます。よろしく願い申し上げます。

委員自己紹介（第1回欠席者）

○事務局

それでは、議事に移らせていただきます。ここからの進行は、松本会長にお願いしたいと思います。松本会長、どうぞよろしくお願いいたします。

○松本会長

先ほど事務局から説明がありましたように、本日は報告事項として前回の協議会の概要、続きまして、協議事項で伊勢志摩地域の高等学校の特色化・魅力化についてと、平成28年度以降の適正規模・適正配置といった2つの協議を行いたいと考えておりますので、前回に引き続き、皆様方から積極的にご意見をいただきますようお願いいたします。

それでは、事項書に従い、2 報告事項（1）第1回協議会の概要について、事務局から説明をお願いします。

2 報告事項

（1）第1回協議事項の概要について【資料2～4】

○事務局

それでは、報告事項、第1回協議会の概要について説明をします。資料2の5ページをご覧ください。前回の概要としてまとめさせていただきました。第1回協議会では、事務局から平成24年度の協議のまとめを資料とさせていただき、これまでの協議の経緯について説明をしたうえで、今年度の協議の進め方について確認しました。県立高校の活力の維持・充実を図るために、各学校の特色化・魅力化について協議を行うということと、学科の割合やあり方を踏まえつつ、当地域全体の県立高校の適正規模・適正配置について協議を行うという2つの観点をお示ししながら、協議の進め方を確認しました。その後、統計的資料に基づき、当地域の県立高校を取り巻く状況についての説明の後、共通認識を図り意見交換をしていただきました。

いただいた主な意見の一つ目ですが、協議時間が限られていることから内容について論点を絞るとともに、協議時間を伸ばすこと、議題ごとに時間を配分すること等も検討してほし

いということ。具体的には、高校の魅力の一つとして進路が重要であると考えているが、そこに論点を絞った協議にすべきであると。

2つ目は、次回の協議会で協議を深めるために、平成30年ごろを見据えた平成28年度以降のこの地域の県立高校のあり方のたたき台となる案を資料として提示してほしいという意見も頂戴しました。

3つ目ですが、高校でいろいろなことを学んで、卒業後の進路についてはっきりした考えを持つようになる子どもも多く、学校行事や部活動など様々な活動も高校の活性化にとっては重要な要素となるのではないかというご意見。

その他は、鳥羽高校についてのご意見だったと思いますが、鳥羽高校は、抜本的な改革も必要になるのではないかと考えており、ワーキング会議と連携の取れた協議を行う必要があるというご意見をいただきました。

第1回の詳細な議事録につきましては、今、委員の皆さんのところにお送りしてあって、本日までにご確認をお願いしているところです。議事録が確定しましたら、後日、郵送をさせていただきますということでよろしくお願いします。

前回の協議会では、伊勢まなび高校や三重県全体の夜間定時制高校への中学校卒業者の進路状況についても把握しておくべきだというご意見も頂戴しました。そのときには詳細な資料を持ち合わせておりませんでしたので、本日、資料として作成して、資料3と資料4ということでご用意をしております。まず、資料3ですが、この地域の定時制高校である伊勢まなび高校への出身地別の入学者数、この3年間の推移のデータです。伊勢まなび高校は、午前の部と午後の部、これは普通科です。それから、「ものづくり」とありますが、スペースの都合で文字が小さくなっていますが、夜間の部には「ものづくり工学」という工業系の学科があります。おおむね伊勢志摩地域、隣接する松阪地域から来ている人数が見えていたのではないかと思います。一番下に「その他」という欄がありますが、これは県外もありますが、定時制高校ですので新卒ではなく、既に中学校を卒業してから入学した生徒が、この人数の「その他」のところに入っています。

資料4ですが、県内の定時制高校の入学者数の推移ということで、伊勢まなび高校を含めて上のほうに3校ありますのは、昼間定時制です。夜間部ですが、それぞれ昼間部の3校は夜間部も持っていますのでそこに入っていますが、その他の県全体の夜間部のところの入学者数を示してあります。ところどころ数字が抜けているのは、例えば四日市工業高校ですと、平成22年度までは「工業技術科」で募集をしていましたが、平成23年度からは「機械交通工学」と「住システム工学」に分かれての募集という形になっています。神戸高校と亀山高校については平成22年度まで募集しており、その後、飯野高校に統合しています。飯野高校については、2クラス80人という募集で入学者数も60、55、51となっています。先ほど言いました四日市工業高校も「工業技術科」では80人の募集でした。その他の夜間定時制は、40人の定員です。今後の協議の参考にしていただけたらと思います、定時制についてもここで資料を出させていただきました。

○松本会長

第1回の協議会の概要について、よろしいでしょうか。何かご意見、ご質問等ありましたらお願いしたいと思います。

○池田委員

まず1つですが、適正規模の問題だけではなく、どういう高校にしていくか、活性化ということですが、従来からの話で各学校ごとの活性化努力は精一杯やっている。地域全体で学校を越えた取組が必要じゃないか。だから、県教委を含めたビジョンが必要であるという意味で言ってきたと思いますが、いつの間にやら各学校でどれだけ頑張っているかという、振り出しの話に戻りかけているような気がするので、それは違うのではないかということの確認が一つ。

もう一つは、この前、私が質問させてもらったのは、志摩半島から夜間定時制高校が無くなっておるわけで、実際にはこれだけの数が伊勢まなびに入ってきておるということですが、特に資料4の夜間定時制だけ見た場合、今のところ、平成25年度で10人ということですが、実際には志摩半島にはないので、来たくても来れない子がいるかもしれない。中学校での需用がどれだけあるかということを知らせてもらったわけです。10人来ておりますが、他のところが普通科であることが多いですが、まなびの場合はものづくり工学というものに絞られている中で、この数字が本当は志摩地域に夜間定時制普通科があれば行きたかった。けど、ないものは仕方がないという数字はこれには表れないですよ。そのあたりはどうか私は伺いたかったので、それはここからは読めないで、これは私がお願いしたのと違います。

○松本会長

1つは、各学校での活性化の取組は進められているので、それを越えた活性化についてはどうなっているかということと、夜間定時制への需用の面については何か把握しておられるかということです。事務局から何かありますでしょうか。

○加藤推進監（事務局）

まず、高校同士の学校間の連携は、実際なかなか進んでないのが本当のところだと思っております。

例えば、高等学校と近隣の小中学校や保育園、幼稚園といったところとの連携は、かなり各学校に広がってきていると思っております。また、学校間で学校の組織運営的なマネジメント的な学校経営品質向上活動といったことも取り組んでおりますが、組織運営的に連携していくことは進んでいると思っております。

しかし、例えばカリキュラムを一緒にしていく、共同的なカリキュラムをつくるか、あるいは、こちらの生徒が違う学校に行き単位を一部取るとか、そういったことは、県内どこの地域においても進められれば、非常にすばらしい面もあって、今後の一つの重要なテーマだと思っております。現状では、クラブ活動の連携などはたくさんあると思いますが、例えばA高校の生徒が、違うB高校に行き単位を取るとか、カリキュラムの中でやるということは、なかなか難しい面が多いと思っております。いろんなアイデアをいただければありがたいと思っております。

定時制・通信制のことについては、別途協議会を全県単位でやらせてきていただいた経緯がある中で、昼間部・夜間部という基本的に4年間で学ぶ定時制についても、3年間で卒業できるような他部履修、違う部との履修も進めていくことを各地域の中でやっていくこととの関係の中で、かつて鳥羽高校にあった夜間定時制が、伊勢まなび高校に統合されていった

経緯があると理解しており、伊勢まなび高校が伊勢志摩全体の中で定時制の昼間部と夜間部の連携を進めていくことを考える中で行われたと思っており、定時制・通信制の問題については、定時制・通信制の連絡会議もあるので、そこで引き続き、今後のあり方も考えていきたいと思っています。

○倉田課長

先ほど池田委員のお話の中で、夜間部に「ものづくり工学科」が置かれているので、普通科を希望する生徒がなかなか行けないというお話がございましたが、伊勢まなび高校の昼間部と夜間部の間では、総合選択という形で、夜間部においても普通科を希望する生徒は、普通科の科目を重点的に履修することによって、普通科として卒業できるというシステムがあります。したがって、伊勢まなび高校の夜間部で学ぶすべての生徒が「ものづくり工学科」を希望しているということではなく、夜間部でも普通科を希望する生徒がおれば、入学して普通科科目を学べるシステムになっているので、そのことについては、伊勢まなび高校から地域の中学校に必ず説明等がなされておると思っておりますので、地域の中学校では、承知いただいていると考えています。

○松本会長

その他はご意見ございませんか。前回の協議会の概要についてよろしいでしょうか。

○池田委員

私の言い方が理解しにくいというか、質問が下手なのかもしれませんが、返ってくる答えと私は聞きたかったことが完全にずれているので。

最初の点については、活性化という形で各学校は完全にオーバーワークで、言われるだけで予算措置もなく教員の数も増えないところで精一杯やってきている。だけど、地域的な条件やいろんなものがあって、少子化を受けてのところや、進学校へ行きたいという地域の保護者の声の中で、学校での努力はもちろんやってきたし、それは皆さん分かってもらっていると思いますが、それでは乗り越えられないところを、こうしてみんなが集まって何かできることがないかと考えているはずなのに、いつも学校ごとの何かとか、私に言わせれば、教育委員会はどんな努力をしてくれたのかというのがいつも見えてこない。毎年5年ぐらいそれが続いている。

それから、私はもしかしたら普通科だったらもう少し数が多いかと思ったんですが、その支障はないということですが、伊勢まなび高校のこの数字は、伊勢から志摩半島全部で、この夜間定時制の数、他の地域と比べて少ないような気がします。本当はもっと希望者があるんじゃないか。志摩半島から仕事が終わってから伊勢道路を飛ばして伊勢まなび高校へ行くのは、鳥羽高校の定時制を廃止するときも地域の声として強い要望が、5時まで働いて5時半までの間に伊勢道路を飛ばして行けるかと。実際に人数はあっても行けない状況が志摩半島に生じているのではないかと非常に危惧しているので、私は質問させていただいています。

○松本会長

もう一度、確認の内容でしたが、意見がありましたらお伺いします。

○加藤推進監（事務局）

活性化のために教育委員会が何ができるということも含めて、この場でもぜひ2つ3つの学校が連携してやれることがあれば、本当にいいと思いますし、そんなことも含めてご意見

をいただければ、そのためにやらせていただいている協議会ですので、よろしく願います。

定時制につきましては、小規模定時制のあり方も含めて、非常に小規模なところをどう活性化していくか、いろんな議論の中で伊勢まなび高校ができたと考えておりますので、これはこれでいろんなご意見があれば、いろんなところでいただければと思っています。

○松本会長

よろしいでしょうか。

それでは、前回の概要を踏まえ、ここから事項書に従って協議事項に移っていきたいと思います。次回までに専門学科検討ワーキングと、鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキングの2つのワーキング会議を2回ほど開催していただくことが決まっております、できればそこに持ち込んでいただくようなご意見、あるいは、その基本となるようなご意見をいただけるとありがたいと思っております。

それでは、3 協議事項、(1) 伊勢志摩地域の県立高校の特色化・魅力化について、事務局から資料をもとに説明をいただきます。

3 協議事項

(1) 伊勢志摩地域の県立高校の特色化・魅力化について【資料5】

○事務局

それでは、協議事項の(1) 伊勢志摩地域の県立高校の特色化・魅力化についてということで、資料を説明します。

資料5として、各高校に作っていただいた資料を8ページから18ページまで掲載しております。この地域の学校をもう一度振り返ってみますと、8ページ9ページが宇治山田高校、伊勢高校ということで、比較的大規模な普通科の高校。10ページにいきまして伊勢工業高校、11ページが宇治山田商業高校です。このあたりは工業、商業の専門学科の高校です。12ページが明野高校ということで、農業、家庭、福祉の3学科を置いている学校です。13ページの南伊勢高校には、南勢校舎と度会校舎がありますので、それぞれの校舎を1つの学校ということで記載してあります。15ページは鳥羽高校、総合学科の高校です。16ページは志摩高校、普通科の学校で、17ページが水産高校、18ページは、伊勢まなび高校で定時制の学校になります。中身についても事前送付させていただきましたので、目を通していただいたと思いますが、もう一度、8ページに戻ってください。各学校の進路指導についてと高校生活についてという2つの項目で資料を作成してあります。その進路指導については、(1) 全般、(2) 進学、(3) 就職、(4) その他ということで、その下に※で各学校の進路の特色がお分かりいただけるように進路状況、大学への進学が多いのか、就職が多いのかというデータ的なこともお示ししてあります。全体的に見ていきますと、進路指導全般というところで共通点が多いと思われる記述は、多くの学校で3年間を見通した計画的な進路指導を行っているということとか、早い段階でのキャリア教育、進路に対する意識づけを行っていることとか、基本的な生活習慣、基礎学力、コミュニケーション力を向上させていることを書いていただいていると思います。

(2) 進学に関する取組が目立って見られたのが、きめ細かな指導をしている、また、授業力の向上を図っていること。しっかりと情報収集をして生徒に情報提供をしているという取組が、多くの学校で書かれています。

(3) 就職についてですが、進路意識や職業意識を早期のうちに育成している。それを通して、早期に離職することを防止している取組や求人開拓に力を入れるなどの記述が多くの学校で見られたと思います。

(4) その他のところで、進路については保護者の意識も高めていこうということ。資格や検定の取得に力を入れていると書かれているところが多く見られたと思います。

大きな2番の高校生活についてというところですが、これも個々の学校でいろんな取組がありますが、複数の学校で見られた取組を見ていくと、例えば、行事や部活動を充実する、活性化、活発化して、それを通して人間性の育成を図っていこうという記述がたくさんありました。地域との連携も多く取り上げてありました。地域、特に小中学校との交流や、地域の行事又はボランティアへの積極的な参加を通して開かれた学校をめざしていこうという取組です。防災や観光をテーマに取り組んでいる学校もありますし、学校便りやホームページを中心に情報発信を地域にしていく取組を書いている学校もたくさんあったと思います。11ページに渡って各学校の取組をまとめましたので、協議資料としてお使いいただければと思います。

○松本会長

用意いただいた資料、各学校の改革の方針なども見ていただき、各高校の魅力化・特色化について、幅広いご意見をいただければと思っています。協議会からワーキング会議に引き渡すためにも、ヒントとなるようなご意見、あるいは、皆様方が外部から見た高校のイメージや思いも含めて出していただければと思っています。

○浅井委員

鳥羽市の校長会で鳥羽高校を中心に活性化についての話し合いを行いました。鳥羽高校のところを見ていただきたいのですが、高校生活のところ『鳥羽高校ニュースレター』の発行とかホームページのリニューアルということが挙げられていますが、校長会で出た意見として「生徒の活動が見えにくい」、「もっと地域に出て活動するべきではないか」、「地域や社会貢献をもっと行ってほしい」という意見が出ました。志摩高校のところを見ると、高校生活の5つ目の○、生徒が地域のイベントに積極的に参加協力し、地域住民との信頼関係の確立と、地域に根ざした学校づくりに取り組むとか、水産高校のところにも、○の5つ目、地域の祭りやイベントに積極的に参加し、地域貢献活動への生徒の参加を促進するというようなことが挙げられています。鳥羽高校のところへ戻りますが、高校生活の○の3つ目、総合学科の系列に沿った学習を進めるというのが挙げられていますが、現状として地域貢献や社会貢献がしづらい部分があるのではないかとということが、鳥羽市の校長会の話し合いの中で出ました。

○松本会長

具体的に鳥羽高校の内容についてご意見をいただきましたが、これに関して、あるいは関連する意見でも別の意見でも結構です。

○谷口委員

先ほど聞かせていただいたことに関連してということで、私の学校は鳥羽高校と上下の関係になりますので、総合学科ができる当初の鳥羽高校は、「新しくなるんだ、こんなことをいろいろやっていくんだ」ということですのでいいPR活動がありました。そのころ、総合学科とはどうなるんだろうということで、子どもたちもワクワクしながら、その当時、受験を迎えたという記憶があります。ところが、ここ数年に関しては、校長会で先ほど言われたとおりに、何をしているのかが見えない状況が確かにあったように思います。

今年度、校長先生が替わられて、「鳥羽高校はどうか」ということで個人的にお話させてもらうこともあり、正直なところ、見えていないということは言わせてもらいました。

今年度、鳥羽高校から配られてきた中に、ニュースレターというか、紹介ニュースというような形で、それまでの鳥羽高校が新聞記事になったものをまとめたようなものを冊子にして綴じて各中学校に配ったりしてもらっているとか、あるいは、鳥羽高校はこういうふうに頑張っているという生徒の様子をレター形式にして配付してもらっているとか、今年度4月からそういうことが始まって、そうだったのかということがやっと見えてきたと、本当に近くにある学校であっても、なかなか見えなかった部分がありましたが、今年度はそういうところが少しずつ見えてきた、変わってきたかという気はします。

地域の中で保育所の子どもたちと一緒に避難訓練をしたとか、そういう部分はありますが、近くにいると何となくやっているのが分かるけれども、他の地域にはなかなか伝わってないところが弱かった部分であると感じます。

○松本会長

特に鳥羽高校は、魅力化・活性化を重点的に考えることが、昨年度までの協議会でも決められており、今回の重要なテーマだと思っております。ここに関しましても結構ですし、その他でも結構です。

○前田委員

この協議事項の(1)、(2)もそうですが、「伊勢志摩地域の」とか「伊勢志摩地域における」と書いてもらってあります。県立といえ、三重県全体の中でというんですが、特にこの地域にありましては、大きな都会にある高校とまた違う、だから「伊勢志摩地域」という言葉は一つのポイントかと思います。(2)でも伊勢志摩地域における適正規模と適正配置とありますので、「伊勢志摩地域の」という部分については、先ほどからも話が出ていますが、ワーキング会議では地域の高校としての特色化・魅力化を高校側だけではなく、例えば商工会の方もおみえですし、こんな学校になってほしいとか、こんな生徒を育ててほしいとか、そういうニーズや要望等を聞いていただければと。特に、普通科でもそうですが、専門学科でも、外から求められていることや、生徒の姿を見ている中学生が、そこへ行って自分たちもそんなことをしたいとなるようなことが見えてくるかもわかりません。ですから、地域性のことについて専門部会と地域部会のワーキングとかで協議していただければと思います。

○松本会長

前回もありましたが、この協議会では学校関係者だけではなく、地域の有識者にも集まっていたいただいております。そちらから見た高校の活性化もありますし、また、それが中学生にとっての魅力にもなるかと思っておりますので、そのあたりも含めご意見ございましたら、ぜひ

出していただければと思います。例えば高校生に期待するものはどういうものかとか。

○太田委員

志摩市商工会は、全国展開事業で特産品の開発等をやっております。その中で、今、志摩市には水産高校と志摩高校がありますが、2～3年前には安乗鯖を利用して、地域の女将さんの会、『いそぶえ会』とありますが、それと水産高校の水産製造・増殖科とコラボして、缶詰を開発したり、今年にかけて「志摩高アイス」ということでコンテストをやりまして、志摩高校のアオサクッキーを使ったアイスクリームを利八屋さんが製品化してくれて、それで、地域活性化をとということで、これについてはNHKとか三重テレビ、また、新聞等で広く取り上げていただきました。

それと、志摩市商工会で商品券の作成に取り組み、その図柄を志摩高校の美術部に描いていただきました。高校生にも入ってもらって地域の団体、商工会とコラボして地域を盛り上げる。地元の高中生もその中へ入っていただき地域が活性化するということで、特に相可高校は有名ですが、地域を盛り上げる形でいろいろ取り組んでいます。それがマスコミや新聞に取り上げられるということで、高校生の励みにもなるということで、そういう形で一所懸命取り組んでいる状況です。

○松本会長

大学でよく感じますのは、やはり生徒には力を試す場があると、教えられるという立場だけではなく、自らの力を試す場があると、非常に伸びると日頃から感じており、特に専門性を学んでいるのであれば、どうすれば世の中の役に立つかという経験をするのは、非常にいい刺激になると思いますし、また一方で高校生とコラボしている地域は、別の魅力が見えるのではないかと思います。産業化もそれをバックアップしていただいているという、良い例だと思います。ありがとうございました。

そのほか、いかがでしょう。

○山岡委員

先ほど志摩市商工会の太田委員から話があって、事前に資料も見せてもらいましたが、確かに志摩高校であったり、水産高校であったり、「サバCAN」であったり、「あおきアイス」などもやって、非常に地域の方々にも喜ばれて、新聞や報道等アピールをしてやっていますが、そのときに頑張っていることは、その高校が頑張っている、高校の生徒が頑張っている、高校の先生が頑張っている。地域に呼びかけたり、いろんなところに出かけていったり、引率もしていただいて、その高校が頑張っている。

一つ疑問に思ったことがあって、水産高校は実習船に乗るんですが、あの釣ったマグロは水産高校に入らないんですね。缶詰を作るときに、水産高校はもう一回あのマグロを買うと聞きました。釣ったものはいくつかただでくれないのかと聞いたら、実習船も県がお金を出して造っていただいているので全部県に持って行って、もう一回マグロなりカツオなりを水産高校が買って缶詰を作ると聞きました。それっておかしくないかと思って、そんなに頑張ってアピールしてサバCAN作りもやったり、あおきのアイスも作ってやってくれているのに、県に吸い上げられて、もう一回買って、缶詰作ってアピールしてということで、そういうことをやっているところに県教育委員会は補助金などを出すことはあるのか疑問に思ったので、そこら辺を聞かせていただけたらと思います。もし、マグロの情報が間違っていたら

すみません。

○松本会長

ただ今の件に関して、水産高校に限らず、そのほか専門学科で収穫等、ある場合に扱いがどうなっているか分かりましたら、事務局でお願いします。

○加藤推進監（事務局）

今、詳細なルールのものを手元に持っていないですが、学校がいろんな形で教育活動をする、今度の土日にも高校生フェスティバルというので、この地域の高校も専門学科を中心にたくさん参加していただいて、明野高校のジャムは大変有名ですが、いろいろ売ったりすると、その収益がいったんお金として入ってくるという部分がありますが、この扱いについては、会計上きちっとしないといけないところがあり、そういう手段の豊富にある学校は、そういう形でどんどんお金が入ってくるという面もありますが、なかなかそういう取組が難しい学校のことも考えていかねばなりませんし、県立高校ですので、実習船にかかる部分も含めて、いろんな部分が県の公的なお金で出ている状況で、それをどういうふうにしちっとしていくかということと、多分、今、おっしゃったのは、生徒のやる気や意欲にもつながっていく面があるのではないかと趣旨も含まれてたのではないかと思います、そのあたりをどう整理するかは、課題としていただきながら、ただ、お金という面については、きちっとやらねばならない部分もあって、課題として持ち帰らせていただければと思います。

○倉田課長

答えになるかよくわかりませんが、水産高校が買うといっても、水産高校の買うお金は実は県のお金です。水産高校が自腹を切って買うわけでもなく、生徒からお金を徴収して買うわけでもなく、水産高校のお金は県のお金です。ですから、ある意味、会計上の処理を明確にしなければいけないということで、そういう形になっておりますので、別に水産高校のお金が減っているとか増えているとかいうことではないと思います。

○中北委員

お話させていただかなければと思っていましたが、基本的には明野高校もできた野菜や卵を売りますが、そのものは全部県に計上します。ただ、そのためには、飼料も要るし肥料も要る。子どもたちはそれだけやるのではなく、実験などもします。その分の予算として、また県からいただくわけですから、モチベーションという部分もあるかもしれませんが、なかなか中身は大変複雑にはなっています。学校によっては様々とは思いますが、精算したうえでの必要経費や、さらに、それにプラスアルファというような形は一定あります。

○松本会長

また大学の話になりますが、大学の場合、国立であれば国の資産を借りて学んでいるということでありまして、例えば農場があれば、農場の収益は国へ行きます。それに対する見返りがあるかどうかは、なかなか予算というのは大規模でいろんな形がありますので、直接的・間接的、見えにくい部分がありますが、生徒たちはその教材を通して学ぶことが本業で、それによってお金をもうけるということになると、本来の学びの時間を削がれたりということもありますので、この活性化・魅力化については、アピールとしていいということはありませんが、それによってあまり学びが制約されるようなことでは問題があるかと思えます。先生方も非常にたくさんの時間を取られて、本来の教育活動の労力を割かれるようであれば、そ

れはある意味、本末転倒であるかもしれません。その辺のバランスとかが大事かと思います。

その他、いかがでしょうか。

○宮崎委員

伊勢志摩地域全体の活性化ということで話をしたほうがいいかと思います。それぞれの高校に個別化していくと、その学校の課題や現状は分かりますが、その学校だけのことではないかと思います。今、ちょうど水産高校のカツオやマグロの話が出ましたので、前から一度お聞かせ願えればと思っていました。

私は、活性化のために高校を、進路を一つの軸にして考えるとよいのではないかと思います。高校を出て進学するのか、就職するときはどういう職場に行けるのか、どういふ職域に行けるのか、どういふ職種があるのかというところが、子どもたちにとっては非常に大きいのではないかと思います。その中で、よく取り上げられる相可高校の食物調理科ですが、今でも全国版のテレビ等で報道されていますが、その様子を見ると、かなり自由に動いているというか、今は学校から離れたのでよく分かりませんが、私が勤めていた中学校でも希望者がいて、なかなか合格がかなわない。合格するまでに親御さんとの面談等があり、「かなり大変です」とか、「土日ありませんし、親御さんが朝早く送ってもらわなければならない」とかというような話を聞かされますが、それでも行きたいということで行くわけです。そこを出ると就職についてもほぼ万全の体制が取れると聞きます。

あれを見ていると先生自身もそうですが、かなり自由に動いていますよね。おそらくは子どもたちの親御さんが、物質的にも、金銭的にもかなり負担をしていると思います。私から見ると、公立の学校としてはかなり自由に動いていると思います。例えば、伊勢にも調理の専門学校がありますが、その専門学校で到底及びもつかないような動きをしています。

そうやって考えると、自由に動ける何かがあるのかと思いますが、本当に思い切った取組をするのであれば、そういったある部門に限って、相可高校の場合はカリスマのような先生がいるからかもしれませんが、他の分野でも同じようなことが考えられないのかと思います。

例えば伊勢なんかですと、市役所の職員でも観光客が1,000万人を超えと思わなかったが1,300万人ぐらいになるといいます。ああいうのを見ると、今、ビジネスチャンスということでいろんなお店ができていたりしています。町の様子が変わってくるわけですが、そこに対して、例えば高校で観光について、いろんなアイデアを出しながら考えていくような学科がありません。

もし、そのような学科があつて、相可高校のように自由に動ける体制が取れば、それはかなり魅力あるものになるのではないかと思います。残念ながら、鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキング会議ですので、伊勢がここには入っていませんが、観光とか、ある分野に特化したような形の活性化は考えられないのかと思います。

そのあたりを県教委の方にお伺いをしたいのは、私の目から見ると、相可高校はかなり自由に動いているように見えますが、それらの仕組みのようなものがあるのでしょうか。

○倉田課長

自由に動くということですが、あくまでも学校の教育課程は履修しなければいけないので、履修したうえで活動しています。特に活動の中心は土日です。平日にどこかへ出ていくということはほぼないと考えています。座学の授業もあれば、一般の芸術や体育の授業も

やらない限り、高校は卒業できませんので、食物調理科になっていますが、基本的には部活動という形で実施をしています。「まごの店」を土日にやっていますが、これも部活動という形でやっているということで、ある程度動ける形になっているんだろうと思います。ただし、全国的なコンテストのようなどころへは出場はしていますが、これも基本的には学業を優先にして、土日、特に夏休みでの参加という形になっていると思っています。

観光の面ですが、先ほどから鳥羽高校の話が出ていますが、鳥羽高校の総合学科の中には観光ビジネスという系列がありますし、今年度から全国的にも観光における全国大会のようなプランニングの形の大会もあるようです。そういうところへ参加し、ある意味、伊勢志摩地域、観光が一つの目玉となっていますので、そのあたりへの取組も徐々に始まっているところかと考えています。

○松本会長

相可高校の件につきましては、私も一度、大学で相可高校の先生にご講演をもらったことがあります、そのときの話ですと、ある意味、甲子園と同じだと。土日なしに生徒たちが自分の技術を磨く場として勉強しているというお話でした。あそこの場合には、調理という非常に目に見えやすい技術を学ぶ学科で、それを実際に試す場として部活動があり、生徒たちは自分の実力を試す意味で、本当にモチベーション高く取り組んでいるのかなと思います。その分の先生の負担も、もちろんあると思いますし、そこに通う生徒、保護者の負担も相当あると伺っております。ですので、専門学科等それぞれ特色もありますので、力を試すような場を提供するのは、先ほど申しました一つの方法かとは思いますが、ただ、それが本来の学科をちゃんとこなしたうえで、どの程度の負担を納得して活かすのかという仕組みが必要かと思っています。

一つ、相可高校の食物調理科の例が出ましたが、そういった形でのご意見も非常にありがたいと思います。その他、いかがでしょうか。

○上村委員

素朴な疑問ですが、相可高校の建物があって、料理を作って無償で提供しているわけではなくて、お金をもらってますよね。それがトントンであればいいですが、先生がいるにしても、高校生の部活動でそういう利益というか金儲けをしていいんですか。それが分からなかったのです。どこの高校でも、部活動だから自分たちで食材を仕入れて何かを売ってというのは、教育委員会としてはOKなのですか。

○倉田課長

営利目的でやっているのではありませんので、実習施設において当然食事を提供している、そのコストもかなり抑えていると。利益がないとは言いませんが、その利益は、実習で使う材料費等に回す必要もありますので、収支益はほぼトントンです。決して大きく黒字を出してもうけていることはありません。

○松本会長

建物あるいは運営に関しては、地域との連携もあろうかと思っています。土地の提供とか。

○上村委員

トントンなら、OKということですね。

○松本会長

当然赤字であっては続けられないですし、黒字が出るようであれば、それは目的と違うということになるかもしれませんね。

○倉田課長

OKというのは、相可高校の食物調理科という学科の実習施設として「まごの店」があるという形になっております。ですから、商売をするということで建てているわけではありません。当然その実習は土日、休みの時間で、いわゆる授業中の実習とはまた別の形になります。授業は授業でしっかりやって、もちろん授業の中で調理の勉強もしますが、それはきちっとしたカリキュラム、教育の中で行われています。先ほど部活動と申しましたので、これは食物調理科全員が取り組んでいるのではなく、ほぼ全員に近い形にですが、部活動という形での実習という整理のもとで行われています。

○池田委員

教育委員会と行政が縦割りでなかなか連携がないので、むしろ、商工会の方に伺ったほうがいいのかも分かりませんが、今、高校の活性化と言っていますが、私がここへ出させてもらっているのは高校もですが、高校と一緒に地域が過疎化して衰退していく状況の中で、学校教育としてどういう貢献ができるかにしても、当然こちらもそのつもりでやっています。ある地域から一つの高校が抜けてしまうことは、特に田舎ではその地域にとっても活性化のマイナスになるだろうという観点を持ってやっています。

質問させていただきたいのは、伊勢志摩・度会のそれぞれの地域で、地域の経済政策としての活性化は今どんな形で検討されているのか。地域の中で地域の活性化の計画と、学校の活性化がバラバラで動いてはいけない気がしますので、もしよろしければ、それぞれの市町等でやっている地域の経済制度を中心とした取組を聞かせていただければ、その近くの高校の取組とをどう連携させていけるかという方向が出るかと思しますので、地域の活性化はどんな具合なのか、もし何かあれば教えていただきたいと思います。

○松本会長

特に就職ということを考えますと、高校生を人材としてどのように見ているのかも含めてご意見をいただけるとありがたいかと思います。

○清水委員

私は鳥羽市ですので、鳥羽市が抱えている産業面中心の社会的課題は、いつも議論しています。今、色んな意見をお聞きして、社会的課題や、こうありたいということは常々議論している中で、直近の例ですが、私どもは大学との連携をいろいろ考えています。特に地方都市ということで、首都圏の大学と今年2つやっています。1つは早稲田大学の学生、大学院生と、「観光性商業はどういうことで活性化できるか」という課題を与え、彼らと協議する。彼らは独自にヒアリング等やアンケートを行って、彼らなりの提案を受ける予定でいます。

もう1つは、海女文化ということでやっていますが、武蔵野美術大学という首都圏の大学ですが、芸術科の学生が「海女文化」を芸術でどうとらえるのか、そういったパフォーマンスとか表現です。一部、作品を提供して、販売します。

その中で、私ども、大学生に過度に期待はしないようにしています。やはり学生のレベルは学生のレベルで、プロの経営コンサルティングもおりますので、そのレベルで若い学生た

ちの発想を取り入れたいという議論をしています。

ですから、私も鳥羽高校で観光甲子園のお話をしたこともありますし、早稲田、武蔵野美術大学の学生が入っているときに、地域の抱える社会的課題に関心を持つ、意識する、そのレベルでも結構だと思いますが、そういう関わりが、今回取れば良かったかなという感じがしています。

この11月にも東京で武蔵野美術大学と首都圏でやりますが、高校生にとっては、大学生がどういう考え方でどういうアプローチをして、どのように解決策を模索するのかというところを周りにいて勉強することのほうが大事ではないかと思いますので、あまり高校生という年代に地域が過度に期待をしすぎるのもよくないと感じています。

○松本会長

私のところは教員養成ということで、各地域の学校に入り、学生たちの学ぶ場を提供していただいています。この伊勢志摩地域もそうですが、そのときに最終的にはこの地域に教員として残ってくれる人はいないかという話をすると、その地域から出てきた学生というのは、地元に戻って教員になりたいという希望を持っています。おっしゃったように、今すぐ直接、高校生が産業に関わったり参画したりできなくても、将来的に地域を支えていこうという気持ちを持つきっかけとしては、非常にいい案かもしれないと思います。

○仲委員

先ほどからの相可高校の話が出ておりますが、南伊勢高校の南勢校舎は、高校生レストランの仕掛け人である岸川さんを招いて、かなり指導してもらい、いろんなことをやってもらっています。先ほど来の関係も大いにあると思いますが、地域にある課題をビジネスの手法で解決する「SBP」という「社会ビジネス創出プロジェクト」というのを立ち上げてもらって、地域の中で単発的な事業ではなく、年間を通して実習的な活動をやってもらっています。地域としては本当にありがたいと思っています。

南勢校舎はこの南伊勢町にとっては活性化のためには非常に大事な存在ですので、ぜひ、このような取組を引き続き、また、さらに伸ばしていただきたいと思います。校長先生もみえていますが、本当にありがたいと思っていますので、引き続きよろしくお願いします。

○加藤推進監（事務局）

仲委員からもありました南伊勢町の地域と連携した取組は、教育委員会ではないですが、知事部局の南部地域活性化局も関わりながら、また、大台町とも関わりながらですが、県、南伊勢町、大台町と大学と高校がコラボし、地域活性化と高校のあり方をつなげていく取組をさせていただいています。

それと、専門学科が中心ですが、地域の行政、例えば伊勢市の行政の首長部局と一緒にやらせていただきながら、高校生が地域の企業について知るということを中心として、行政が間に入らせていただきながら、地域と学校とつないでいく形でやらせていただいています。

○松本会長

先ほどから相可高校の例がよく出ていますが、先ほど私が申し上げた、目に見えやすい技術、しかも高校生のレベルで即、就職に結びつくようなものと、一方で、ある意味、複雑で高校を出て進学してからそこに就くようなものもあるでしょうし、一つの形でまとめにくいような専門性といったものもあるかと思いますので、各高校の特色も見据えながら、地域

とどのような関わりを持っていけるかというのが、いくつかの案の中で示されたと思いますが、そのほか、もう少しありませんでしょうか。

○山北委員

地域の産業部門といいますか、我々の携わっている仕事の関係で、たまたま私どもの地元の高校は普通科です。その普通科の中でも地域の体験等を行っていただいている状況ですが、私どもも過疎が進んでいるような状況の中で、中山間地域の田舎という状況の中、特産品の開発を行いながら、これから観光に向けてたくさんの方が来ていただけるようにしたいというところ です。

特産品開発については、私ども、高校生のアイデアをいただきながら進めたいということもあり、検討もしましたが、先ほどから出ておりますお金の面で、そのアイディアに対するお礼を学校にということも非常に難しいようなお話もありましたので、三重大学のほうにお願いをし、大学生で研究開発を行っていただいたこともあります。

あと、全般の中で地域の子供が地域で就職していただければ一番いいのですが、私どものところは非常に事業所が少ない状況です。ただ、小規模な事業所の中にも最近では伊勢工業高校を卒業されて、町内に就職をされることもあると聞いてますので、そういう小さな事業所の集まりのところですが、成果は上がっていると思います。

ただ、平成27年度からの学級数の減少ということも聞いており、地元の高校だけではなく、可能であれば、たくさん的高校生が私どもの町にも一度足を運んでいただいて、私どもの産業の、新茶の頃にお茶を摘むとかという体験もする等、私どもの町にたくさんの方が来ていただければと思います。昼夜間の人口比率は三重県内でも一番低い町が私どもですので、そういう部分から、人が入ってきていただくことが活性化の源になると考えています。

○松本会長

高校と産業との関わりでたくさん意見をいただきました。

○小川委員

私、水産高校の卒業生として、先ほど志摩高校や水産高校の取組で地域のことなどいろいろとありましたが、私自身、高校へ入って今でも思い出となっているのは、地引き網をしたり、遠泳をしたりしたこと。夏休みの前に10キロを泳いで、1年生はまず10キロを泳げないといかん、そういう経験もあります。実際に乗船実習をさせていただいたこともあります。

ただ、自分は水産関係の仕事に就くことができなかったのですが、前回の会議も踏まえて水産高校については、学級減も視野に入れたという話もありました。ただ、活性化ということで、本当に地域にとってなくてはならない学校が地域のために一所懸命いろんなことをやっています。おかしいかもしれませんが、学科を減らすのではなく、定数を減らして30人学級とかいう中で、より就職に対しても学力の向上に向けても取り組んではどうかと考えます。高校に入ってから進学したい方、就職したい方が出てくるでしょうし、そういったときに地元からの入学者数が少ないから減らしてしまう、統合してしまうとかいうものではなく、逆に魅力ある学校としては、少ない人数でより水産課程の高度な勉強をしたりということもやっていく必要があるかとは思っています。学校の定数は決まっているんですか。

例えば今、30人のクラスがあっても、魅力あるクラスづくりとして20人でもいいかと。

それが地元に必要な人材をつくるものであれば、よりいいかと。逆にクラスが20であれば、いろんな意味で動けるんじゃないかとも感じますが、そういうのは考えてみえるんでしょうか。

○松本会長

規模の話も含めて考えないと、なかなか魅力も出せないということで、前回の協議会の中でもそういった意見がありましたが、もう一度、事務局から定数の件に関してお願いします。

○加藤推進監（事務局）

第1回目のときと同じような説明になってしまって大変恐縮ですが、基本は高校標準法、もちろん小中学校にもありますが、法令によって教員の数が決められています。国全体の中で議論されている状況です。どちらかと言えば国の中で小学校、あるいは中学校のところから、議論は進められていますが、まだあまり進んでいないかと思っていて、高校まではなかなか来ないような状況です。県立高校については1学級40人が基本ということで、今のところ、それを35人や30人にする見通しは持ってない状況です。

○小川委員

小学校や中学校は義務教育の法律であるんですが、逆に高校であれば、義務教育ではないので、自由にそのあたりを使えるかという僕の印象があります。なぜ高校がそれに関連するのか素朴な疑問があります。

○加藤推進監（事務局）

公立の学校は、元になる法律に従って運営されており、義務教育とよく似た仕組みの中で動いています。

○松本会長

活性化のために少人数編制を実現できないかというご意見ですが。

○加藤推進監（事務局）

どの地域でも同じようなご意見、伊賀に行っても尾鷲へ行っても熊野へ行ってもいただきますが、県全体として1学級40人規模の原則の中でご意見をいただいている状況です。これを35人、30人にしていける状況ではないと思っています。

○松本会長

予算が決まっていて、法律上、教育には教員の人数が決まっている。そうすると、例えば20人の生徒に対しても40人と同じお金がかかるとなると、予算を浮かすレベルで議論をしないとだめだということです。もちろんそういう結論を提案として出すことはあり得ますが、それを県議会が認めるかということは、また別の問題となります。

○小川委員

そう考えると、すべてが予算ありきということに。

○松本会長

予算の話すればそういうことだということ。

○池田委員

今、会長が説明してくれましたが、私らを押しってくる義務教育国庫負担金の算出基準であって、定数というのはそういうものなので、現実には水産は30人で生徒募集していると思います。普通は40人です。金の問題と言えば金の問題です。だから、私らは県に頑張っ

しい。県教委だけでなしに財政も含めて頑張ってもらいたい。学校の実情に応じて30人、35人というのは、なんとか頑張ってやってくださいというのは私らの願いです。端からだめという感じで受け止めていただくと、つらいものがあります。私らの願いは、かなり共通してそこにあることはしっかり受け止めていただきたいと思います。

○松本会長

特色化・魅力化を打ち出すためには、1つには少人数を実現することがあるのではないかというご意見です。たくさんご意見をいただきましたが、段々その話が適正規模の内容も含まれてきたかと思います。もちろん、この議論は特色化・魅力化と切り離して適正規模があるわけではないので、関連してくるのは当然かと思います。

時間もありますので、このあたりで次の議論に移りたいのですが、もう一度、池田委員ご意見ありましたらお願いします。

○池田委員

今のいくつかお尋ねしたもので、ある程度特定の話ですが、私が聞かせてもらったところは、伊勢の市民病院のこと、この田舎のほうまで来てくれるお医者さんが少なくなってきたので、伊勢市のほうで三重大と連携して奨学金かな、卒業したら伊勢病院へ来てもらうようにという形で、地域の医療を残していくんだということがあります。だから、地域の活性化とそれぞれの学校が、これはほんの一例の偏った例かも分かりませんが、これが今後、地域の活性化、地域の過疎化を防いでいくときに、より大事になるかと思っていて、具体的にどうというのはありませんが、ぜひ、このまま地域を少子化や過疎化といって廃れさせるわけにはいきません。なんとかしてかなければならないときに、双方が協力し合っていることをできるだけ考えてほしいと。これは教育委員会の皆さんにお願いしたいところです。そういうので聞かせていただきました。

○松本会長

魅力化・活性化につきまして、地域との連携、あるいは商工会との取組の紹介も含めて、様々な角度からご意見をいただいたと思います。これをワーキング会議へ持っていったら、もっと具体的な内容に展開してもらえるのではないかと。あるいは、それを元に新たな発想のご意見が出てくるのを期待して、大体このあたりで魅力化・特色化については議論をまとめたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは、協議事項(2)の28年度以降の伊勢志摩地域における県立高校の適正規模・適正配置について議論を移していきたいと思います。これについても、まずは事務局に基本となる内容の説明からお願いしたいと思います。

(2) 平成28年度以降の伊勢志摩地域における県立高校の適正規模・適正配置について
【資料6】

○事務局

それでは、協議事項の(2)平成28年度以降の伊勢志摩地域における県立高校の適正規模・適正配置について、前回の議論でたたき台となる案をというご意見もありました。そこで、事務局が作成したものを資料6として用意しています。資料6は一番左側が平成26年

度、今の中学校3年生の子どもたちが平成26年度入学生となりますが、今の中3の子どもたちの卒業予定者数は、2,394人ということで、宇治山田高校から水産高校までそれぞれの学校の募集定員が決まっています。それを合計すると、全日制ですが、42学級となります。先ほどから言っていますように、普通科の学校や専門学科の学校がありますので、学科の割合は、一番下にありますように、この地域では普通科が50%、専門学科が43%、総合学科が7%となっています。

さらに、その1年先、平成27年度ですが、今の中学校2年生の子どもたちが伊勢志摩地域の中学校を卒業するときには、2,316人ということで、約80人ぐらい減少し、全体としては38~39学級になるだろうと予測しています。その欄に学校が並んでいて、吹き出しが4ヶ所あると思いますが、まずは南伊勢高校のところですが、両校舎を1学級募集としていく。そして、全学年が1学級となる時期に両校舎をそれぞれ他の高校の分校とすることを検討する。鳥羽高校は、総合学科のあり方と魅力化・活性化について重点的に検討する。志摩高校は、引き続き魅力化・活性化について検討する。水産高校は、学級減を視野に入れながら、今3学級ありますが、学科コースのあり方と魅力化・活性化について検討する。この部分については、平成24年度、昨年度の協議会で既にまとめられている部分です。3月に策定しました「県立高等学校活性化計画」にも記載していることは、前回の協議会でも報告させていただいたところです。

本日、説明しますのは平成28年度以降ですので、その次のところです。右側の平成33年度のところをご覧ください。平成33年度に高校生になりますのは、今の小学校2年生です。その学年が、この地域では、卒業者が1,850人になるだろうと。ですので、平成27年度に比べても約500人近く減っていくことになると思います。上から順に、吹き出しのところを見ていきますが、まずは宇治山田高校と伊勢高校の普通科のところですが、2校併せて13学級程度になることが予測されるだろうと。その次、専門学科の高校を3つ囲んでありますが、3校合わせて12学級程度となることが予測され、これら5つの学校で22学級から25学級程度になるだろうということです。続いて、南伊勢高校のところですが、存続していくには地域等と連携した大幅な活性化が必要であろうと考えられる。鳥羽高校と志摩高校のところを括弧でくくってありますが、これは平成30年度頃以降にそれぞれ2学級以下の規模となることが予想され、南伊勢高校から水産高校までのところで、6学級から9学級ぐらいになるだろうと予測されます。そして、伊勢志摩全体で30~32学級程度になるだろうということです。

一番下に※がありますが、伊勢志摩地域には、私立高校として皇學館高校と伊勢学園高校、2つあります。今ある県立高校と私立高校の募集定員の比率、割合、中学校卒業者が市町を越えて高校進学する比率、どこの町からどこの市へ行っているという比率が現在と大きく変わらないという予測のもとにこれを出しています。※の2点目ですが、地域における募集定員の普通科、専門学科、総合学科の比率、上に50%、43%、7%とありますが、その比率、それから、伊勢市内の高校と鳥羽・志摩・度会地域の高校の比率、それも現在と大きく変わらないという場合の予測として、平成33年度は出しているということです。中学校卒業予定者数は、平成25年5月1日時点の教育総務課による調査ということで、資料1の表に基づいて作成しています。

○松本会長

適正規模、適正配置についての案がたたき台として事務局から示されましたが、これにつきまして質問、あるいはご意見、コメント等でも結構です。どなたからでも積極的にいただけましたらお願いします。

○前田委員

先ほども最初に言わせていただきましたが、「伊勢志摩地域における」というのが冠にあります。国の規準においてとか、三重県全体においての県立高校というのではなく、伊勢志摩地域におけるということになりますと、先ほどの小川委員や池田委員のことも、1番と関連するものと思います。最初に会長が、生き生き学ぶ環境を整えるためにこの会があると言っておられました。高校生がそこで生き生き学ぶ、そんな環境の学校をこの会はめざしていくということですから、やはり生き生き学んでいくためには、きめ細かく先生たちに指導される、あるいは、自分が地域で活動する姿がみんなから見てもらえる、あるいは、進路がこの高校へ行ったら少なくともこういうところは必ず保障されることが見えているとか、その辺のところがあるかと思います。伊勢志摩地域における県立高校の適正規模と適正配置ということになっておりますので、適正規模という適正という言葉は、何を基準にするかというところですが、これは「伊勢志摩地域における」が冠であると私は思っています。義務教育は国の規準は標準法の40人になっておりますが、低学年の子は県独自でやっております。財政が厳しいと言われればそれまでですが、そこをどうするかは、この提言、ここで揉む部分についても端から40人と言え、それ以上審議ができないと思いますので、その辺は伊勢志摩地域の活性化・魅力化・特色化ということも踏まえながら議論していただければと思います。

○松本会長

ただ今、県全体での決められた規模を前提に議論をしては、この地域の特色を出せないのではないかということも含めましてご提案があったと思います。

その他はございませんでしょうか。

○山岡委員

資料6を見せてもらって、結局のところ、人数が減れば学級が減るんだなと。だから、いくら魅力化・活性化といっても、人数が減ってしまえば学級減、学科が減っていくことだと、事前に渡された資料を見せてもらいながら考えていました。

今、伊勢の高校というと、自分が卒業した高校も10学級以上あったのが減ってきているんだなと見せてもらいましたが、皇學館高校が今、10クラスあるそうで、自分らがいたときから考えると倍以上のクラスがあります。しょせんは、先ほど予算を言ってきたらという話でしたが、お金かと。高校説明会の話をついよんな方々に聞きますと、非常にすばらしいプレゼンテーションであると、非常にきれいであると。他の公立高校は非常に汚かった、トイレが臭かった。そうなってくると、魅力化、活性化とはお金なのかと、資料を見ながら考えたりもしました。

公立高校の先生は頑張っていますし、いろいろな取組をやっていますし、地域を巻き込んでやっていますので、そうなってくるとお金のかけ方もありますし、先ほど会長がお金儲けのことを言われましたが、自分は水産高校のことを考えてみますと、専門学科ですので、もの

をつかってその技術を売ってなんぼやと考えておりますので、そういうことを子どもたちに学びとしてやっていくというのも、モチベーションを上げることになる一つかとは考えております。

そう考えていきますと、この資料を見たときに、きれいな学校にはたくさん子どもは行くのかな。保護者の声であったり子どもの声では、魅力化・活性化というより何よりも勝ってしまうものなのかと、資料を見たり、いろんな人の声を聞いたりしていますと考えてしまう自分がありました。

○松本会長

学ぶ環境、目に見える部分の環境において、そういったものも中学生には魅力と映るのか、保護者には魅力として映るのかというご意見です。

また自分の話をしますが、大学なんかもそうできて、国公立大学は非常に建物が古い、あるいはキャンパスの写真などを見ても、私立大学は非常にきれいなキャンパスを用意してということが、よく取り沙汰されます。しかし、場合によっては、例えば国からの予算の充て方は、実際には見えるところばかりではなく、学生数で割り算すると全く予算規模が違うということとか、学生1人あたりの教員の人数が違うこともあったりします。ですから、おっしゃっていただいたような私立高校と県立高校等の違いをどのように打ち出していくべきか。それが単に見える部分だけではない魅力として見れば、また違うかもしれませんし、予算の使い方として、場合によっては見えるところにも何か改善の余地はないのかということのように私には聞き取れました。また、高校の特色を活かして枠を外してでも打ち出すことで、また新たな魅力が見えてくるのではないかとことであつたかもしれません。

この事務局からのたたき台の案の前提として、先ほどありましたようにこの地域から出て行く他の地域の高校に通う生徒や、あるいは私立高校に通う生徒との比率は変わらないという前提の案ということですので、それが崩れてくるようであれば。

○事務局

変わらない場合が前提であるということです。

○松本会長

変わらないということであると、こういう案になるということですから、その比率が将来的に変化があれば、この案も変わってくることもありますので、先ほどから申し上げているような魅力化・特色化と併せて、このことは変わってくるかと思います。

○亀谷委員

学級数が減るということですが、これは人数が減ってくるからしょうがないと僕は思います。学級数が減ることが、その学校の活性化が落ちることとは別問題だと思います。3学級が2学級になったら活性化が落ちるか、そんなことは全然ないと思うので、やはりそれはその学校がいかに活性化をするか、特色を出すかということだと思います。他の学校に負けないような、うちはこんな学校なんだ、うちへ来てくれたらこんなに違うというようなことを各学校が示せば、学級数が減ることなど、そんなに問題にはならないのではないかと思います。人数が減れば学級数が減るのは致し方ないと思います。

○池田委員

意見としては亀谷委員に賛成です。質問ですが、県立学校と私学の生徒数の比率です。昔

の8対2が、今は7対3になっているとかその辺のことですが、どういう推移で今に至っているのかと。今の比率が変わらなかったらというのはどういう比率で考えてみえるかという質問が1つ。

それから、この提案の趣旨がよく分からないのですが、このようになりまして聞きました、これは※の真ん中のところの、これを今後どうするか検討しようということであるのか、それとも、こうなるので、これで了解してという提案だったのかの確認です。

○加藤推進監（事務局）

まず、県立と私立の比率ですが、平成12年度までは県全体で募集定員で県立が80%、私立が20%ですと変わらなかったときがありました。その後、毎年の入試状況や進路状況を精査しながらやることで、「公立高等学校協議会」という別の県全体の協議会で公立の代表と私立の代表と行政関係、学識経験の方も入っていただいて検討しています。平成26年度は、県全体で県立が78.0、私立が22.2、足して100%にならないのは、完全にどちらかに割っているのではなく、重なる部分があります。中学校卒業予定者数より少し多めに定員がありますので、78.0対22.2という数字に県全体ではなっています。

伊勢志摩地域では県立が少し低くなっていて、75%程度です。私立が25%程度で推移をしています。これらをデータ的に言うとそういうことになります。

枠組的に言いますと、県全体の募集定員総数を決めたいと、公私それぞれが独自に各高校の定員を決めます。県立は県立全体の枠が決まった中で、北勢に何人、中勢に何人、南勢に何人、南勢の中で明野高校は何人というふうに、これは県教育委員会が決めていきますし、私学のほうは私学全体が決まった中で私学の中で、暁、メリノール、伊勢学園等々が協議をして募集定員を決めていくのが今の動きという現状です。

今後、どうするかということについては現状のような比率や動き方が今後も続くとしたら、こういうことが予測されるというものをいただきましたので、これをもとに今後、どのように、今、亀谷委員からもありましたが、それぞれの学校を活性化していくのか、あるいは適正規模・適正配置ですので、統廃合も考えるのか考えないのかということも含め、皆さんからご意見をいただければという趣旨です。

○松本会長

これはたたき台としては、現在の比率ではこうなるということであって、これをどうしていくか議論するのがこの場ということだそうです。

他にございませんでしょうか。

○藤田委員

資料6の案を見せていただいています、まず、県教委の基本的な考え方をお伺いしたいのですが、私学を見ますと、平成23年度から50、60、70と定数より余分に入っています。資料6は、そういう流れも、定員よりもプラスして私学へ行くことを前提として組み立てられているのか。

それから、県立高校の適正規模ということで、3学級から8学級程度という状況の中で、3学級の小規模校の廃止、これからどんどん人口が減少していくわけですが、そういう状況の中で人口減の分については、公立高校で減らしていくという基本的なスタンスがあるんじゃないだろうか。そういう状況の中で3学級以下の小規模校の廃止が見込まれていくよう

な案になっているのではないかと感じ取ったので、その辺の県教委の考え方をお聞かせいただきたい。

○松本会長

私立高校の変化をどのようにとらえておられるかということと、今後の小規模校のあり方について、事務局からお願いします。

○加藤推進監（事務局）

ご指摘いただいた私立が、このところ、この地域では定員よりもたくさん生徒が入っている状況があるのはおっしゃるとおりで、これは伊勢志摩地域だけではないですが、私学側とは県全体の枠組みの中で県立側としては指摘等をさせていただいています。ただ、私立側は、1月や2月初めに入試があつて、その後に県立の入学者選抜があつて、県立を第一希望にして私立を第二希望にされる場合もかなりたくさんあり、県立に合格すると私立の合格者が、県立のほうに進学するという状況があります。なかなかぴったりとはいかないというのが私学から聞くところです。資料6の今後の予測を考えるうえで、今、たくさん私学に進学しているので、今後もっと私学に流れるだろうということでは考えておりません。あくまで入学者数ではなく募集定員で今の比率が大きく変わらない場合は、こうなるであろうということです。比率が変わらないということは、当然県立も募集枠としては減るし、私立も同じような比率で減っていくことを想定した場合はこのようになるだろうという想定で考えています。

小規模校については、これも県全体の活性化計画の中で明らかにしているところがあり、2学級以下になった場合は、原則として分校とするとともに、今後の活性化等について協議をおこなうこととしています。将来も含めて今、他地域も含めて伊勢志摩地域では協議をしていますが、3学級を割って2学級以下になる場合は、原則として分校となります。分校の呼称は分校という名前は使わずに、原則として〇〇校舎というのをを用いることが基本として考えていくこととなります。

ただ、3学級以上の学校にあつても、今後の生徒数の減少を見据えて、3学級以上であればいいということではなく、それぞれの学校ごとにめざすコンセプトがありますので、そこから考えて学級規模や学科の構成、地域との連携のあり方など多様な視点から活性化を考えていかねばならない。3学級になったら、即、廃止と考えているわけではありません。ただ、場合によっては、統廃合したほうが活性化するというようなこと、例えば紀南地域ではそういう協議をされていることはありますので、様々な視点から考え、客観的な状況の中で、今後、これらの学校が魅力を維持し、さらに充実するためにはどのような方策が考えられるか、様々な視点からご意見をいただければという考え方です。

○松本会長

よろしいでしょうか。その他、ご意見ございませんか。規模と、魅力の一つとしては、例えば、部活動等も学校全体の学級数が減ってくれば、部活動の維持が難しいとか、対外的な試合に出る人数が足りないというようなことも起こってくる可能性もあると。そういったところも一つだとは思いますが。

これはたたき台でして、これが変わらないということではなく、これをもとに色んな意見を出していただければ、その方向にこの協議会の結論は向いていくと思いますし、ワーキン

グ会議にもそれが伝わっていくということだと思います。

○池田委員

前の再編活性化会議、この会議の前身の会議での大体の議論は、伊勢市内校の数とそうではないところの数のバランスを取ってやっていくということだったので、これでいくと22～25学級と書いてある、6～9学級というのが大幅に差がないように、下の4つのグループが、上の5つのグループの地域の人たちと協議をして数を決めていく形で、一方的に伊勢市の市内校を多くしていくのではなく、下の4つのグループのところを減らさないように協議して進めていくのが基本原則でしたが、その話は今、立ち消えになっているのかという質問です。

○松本会長

伊勢市内地域と鳥羽・伊勢・志摩地域、度会地域の学校との比率の件です。事務局、お願いします。

○加藤推進監（事務局）

下の3つの※の真ん中以降にありますように、伊勢市内の高校の募集定数と、鳥羽・志摩・度会地域の高校の募集の比率が、大きく現在と変わらないという場合には、22～25対6～9になっていくという考え方でこの資料をつくっています。

○池田委員

前の合意はどこへいったんですか。3年ぐらい前に決めたでしょう。この志摩地区の会議だけじゃいかんからというので、拡大というので伊勢市の教育委員会の人たちも一緒に入れて相談したでしょう。名前は去年から変わってますが、私、ずっと5年間出てきているので、前の再編活性化会議のときの一つの重要な決定事項で、市内校と鳥羽・志摩・度会地区の学校のバランスを相談しながら決めていく。基本的にはこちらはこれぐらいでというような大枠を取り決めてたはずですが、それを忘れたのでは非常に困ります。

○加藤推進監（事務局）

一昨年の協議のまとめ、去年の協議のまとめに書かれていたような比率の流れを踏まえて、この資料は作られていると思っています。

○松本会長

伊勢地域と鳥羽・志摩・度会地域の高校の比率が変わらないというたたき台内容であるということですね。

○池田委員

これは今の比率をそのまま想定してこちらへ書かれたと僕は理解しています。そうではなくて、今後、全体が減ってくるときに、伊勢市内の大規模高校を減らす形で周辺の小規模校の数をそれほど減らさないという形。ただ、これは保護者や地域の人たちと協力して話をしていかなければならないというので、拡大で伊勢市内の人に入ってもらうこともあり、数年前は進めていて、なかなか結論は出ないが、今後、それも協議していくべきとなっていたはずですが、どこへ消えたのか。

○松本会長

ワーキング会議の内容ではなく。

○池田委員

ワーキングではない。前の再編活性化会議。

○事務局

今、池田委員がおっしゃっているのは、伊勢市内の高校だけを残して、それ以外の鳥羽・志摩・度会地域にある高校だけをどんどん減らしていかないということだと思います。子どもたちが減っていくので、それに応じた形で、それぞれを減らしながら進めていくという考え方に基づいて、この資料6は作ってあります。ですので、子どもたちが減っていく中で、市町別の減少の割合に応じて伊勢市内の学校だけを残しているわけではありません。

○池田委員

前の再編活性化会議のものは、伊勢の方はいませんでした。南伊勢高校と鳥羽高校、志摩高校、水産高校の関係の者で相談していて、そこでの結論として地域の学校を残すためには、伊勢市内の大規模校にも協力をしてもらわないといけないというので、1年間検討した後、年度末ぐらいで拡大協議会というような形で意見交換をして進めていました。そのときの取り決めを知らないというのでは。

○松本会長

議論が今かみ合っていないようです。

○池田委員

過去の記録を後で調べておいてください。

○松本会長

昨年までの協議会では、当然、伊勢市内の委員もみえたわけですね。おっしゃっている協議会というのが。

○池田委員

平成22年度までは、第3次の再編活性化だったと思います。そのこのところですよ。その後、今度は新しい段階に入りました。その段階に入った時点でそれまでの第3次のところの取り決め、最終結論の数字まで出てないですが、話の筋が切れているのはおかしいと。

○事務局

平成24年度の協議のまとめは、第1回のお話したと思いますが、平成23年度の協議のことをおっしゃっているんですね。平成23年度の協議については、前回の資料では、平成24年度の協議のまとめの冒頭のところに、「平成23年度の協議においては」という部分が経緯として示させていただいてあります。そこでは、平成27年度を目途とした小規模校、南伊勢高校、鳥羽高校、志摩高校及び水産高校の統廃合、分校化の具体策を平成24年度にまとめるということが、平成23年度に確認されたということです。ということは、平成24年度にまとめることが確認されて、昨年1年間の協議がなされて、そのまとめは、前回、報告させてもらったとおりです。その協議に基づいてずっと進めてきたことから今日の資料があるということで、あまり筋道が反れていることはないと思っています。

○池田委員

まとめは、皆さんの意見がまとまらないので、最小限まとめとしてこれだけは書いてもいいと、何らかのまとめはしなければならないということで、この範囲なら書けるというだけ書いたもので、それ以外の問題がそこで全部取消になったわけではないです。

○中北委員

私も断続的にこの委員をさせてもらっておりましたので、つながりの部分で分からない部分がありますが、平成22年か23年には、池田委員がおっしゃるような案が2つ出ていたと思います。A案、B案という案で話が進んでいましたが、最終的にはそれで結論は出てないと思います。出てないので、それを引き継いで今の案になっていると理解したら、私はいいかと思っています。

○池田委員

引き継いだらこれと基準が違う。

○中北委員

あのときには結論は出てないです。ですので、今、たたき台に出してもらったわけですが、これはそれで引き継いで、あのとき、結論は多分出てないと思います。

○池田委員

持ち越しになっているので、それはここで結論を出していかないと。いつの間にかこれでというのはおかしい。

○松本会長

今のお話では、平成23年度の協議会で2つの案が並立して出され、その結論は出ていなかったと。それを受けて平成24年度の協議会が行われていたが、そこでの結論からは、一方の案が無くなっているのではないかと。それを引き継いで今年度の協議会が進められているというご指摘だと思いますが、これについて事務局で何かありますか。

○加藤推進監（事務局）

同じことを申し上げることになり恐縮ですが、平成23年度の協議をもとに、平成24年度の協議は小規模校の話に特化した協議でした。今年度はもう一度、伊勢志摩全体に立ち返るという、基本的にはこれが大きな流れです。この平成23、24、25の協議の流れとしては、平成23年度までは伊勢志摩全体を協議して、平成24年度は伊勢志摩全体も見据えながら、小規模校にある程度特化した議論をしていただいたと。今年度はもう一度伊勢志摩全体に戻って、平成28年度以降の協議をしていくということです。

その際、第1回るときに資料として出させていただいたものを、全体の数字はそれと全く同じで今回は出させていただいています。第1回るときに資料をお手元に皆さんお持ちでなければ恐縮ですが、例えば平成33年度に30から32クラスになっていくとか、伊勢市の高校が、本日の資料の一番右端の22～25という学級数とか、6～9という学級数についても、第1回の資料をそのまま踏まえて今回出させていただきました。これはあくまで同じであった場合の見通しですので、これを基にご意見を、これをたたいていただくためのたたき台ですので、これをいろんな角度からたたいていただければいいのではないかと思います。

○池田委員

結論が出なかったもので、A案B案の確定は棚上げにしておいて、進められることをしてこうというふうになっていて、棚上げ状態だと理解しています。別にこれは今、これで行けと言っているわけじゃないので、これは単なる数字であって、原案というわけでもないし、A案でもB案でもない。

ただ、私が質問したのは、あのときの議論の延長上というか、A案になってきたいきさつ、B案になってきたいきさつは、今後結論を出すときに非常に大事かと思っておりますので、それなしという進め方でいいかということです。

趣旨としては、できるだけ、これでいうと下のところを守りながら上のほうの協力を得ていくと。しかし、市内校の声もなかなかすぐにはまとめられないので、今後どうしていくかと。それで、宙に浮いて今になったということは、教育委員会としては踏まえたうえで進めていただきたかったので、そうじゃないみたいに聞こえたので、どうかということでもらいました。

○前田委員

私の記憶では、こういう県教委から将来の生徒数の推移を示された。あまりにも伊勢市内以外の生徒数の減が大きいではないかと。それなら、そのままいくと伊勢市内以外の高校にしわ寄せが行きすぎるから、伊勢の高校にもその減っていくのを緩和するために、伊勢市内の高校の学級数を減にして、こういう推移をするであろう以上に減にしてこちらへ回すという話も出ていたように記憶しています。

ただ、それというのは、伊勢市から鳥羽なり志摩なり度会なり南伊勢のほうへ生徒が来るかということもあり、それは現実的ではないという審議がされた記憶がありました。ですから、そういう話で応分の負担を伊勢にもお願いをしたいという話も確か出ていたようにも思いますが、それは現実的ではないというところになったような記憶があります。

○松本会長

過去の経緯をいろいろご紹介いただいたので、今年度の委員の方々も少し議論の一つの手段が見えたかと思っておりますが、現在の比率を延長して伊勢市内の高校と、鳥羽、志摩、度会地域の高校との比率を固定するという案だけではなく、場合によってはその比率を変えてでも、この適正配置の問題を考える方法もあるのではないかとということが、過去には議論されたし、今回も事務局から示されたたたき台が固定ということではなく、そういった方向が出されるのであれば、それはこちらの協議会の案ということもあり得るということだと思います。

ただ、先ほどおっしゃっていただいたように、実際に定員比率を変えた場合に定員割れを起こしていかないのかという問題も一方でありまして、それは現在の高校生の志望の調査や現状の高校の定員の充足状態等を勘案すれば、ある程度予測できるところもあるということで、そういった数字の問題も踏まえながら考えていきたいと思っております。

その他、このたたき台に限らずですが、適正規模・適正配置全般に関してでも結構です。ご意見はございませんでしょうか。

○浅井委員

校長会を代表しておりますので、個人的な意見になってしまうとまずいですが。私は鳥羽市のへき地教育振興会の係をしまして、今週の火曜日に離島を回りましたが、学校があるというのは、つくづく、いいなという感想を持ちました。それと、私、度会町の中川の出身で、中学校が無くなって小学校が無くなって、これでまた高校が無くなっていったら本当に寂しい思いをすると感じております。学校というのは、その地域の文化、中心になると考えておりますので、こういう適正規模、基準、比率もいいですが、やはり活性化を中心に考えていったほうがいいのではないかと考えております。

○山北委員

今年度から委員ということでお世話になりましたが、前回の初めてのときに質問させていただいた、伊勢市内の協議がなかったのかと。郡部のみが平成27年の計画で言及されているということで、生徒数全体が減るのに、なぜ伊勢だけが残るんだろうという疑問があり質問させていただきました。今日、この場でいろんな過去の経緯を伺いまして、やはり協議をされていたんだなということで安心もしております。

前回、質問をさせていただきましたが、小規模校だからということの意味合いがよく分からなくて、そのときは発言を止めましたが、今度の平成33年度の案まで拝見させていただきますと、当然、度会地域は廃校ということも見えてくるんだろうと勝手に思っています。

活性化ということ、確かにクラスが減ったから活性化ができないということではないと思います。人数が少なければ活性化、また、地域とのふれあいも難しくなるということもありますが、1つは学校を、例えば私どもでしたら普通科ですので、普通科の役割をもう少し見直して、魅力のある学校をつくるには、学校そのものの機能、役割をもう一度考え直すことも必要ではないかと。その学校に行けばこれだけの保障があるということもできるのであれば、そういう方向を見せていただかないと、おそらく人口的なこと、先ほど協議されていた、なかなか町から田舎へ出ることが非常に難しいと思いますので、そこを跳ね返すのは、活性化も必要ですが、学校自身の抜本的な改革も必要です。そこまで私どもが言える立場ではありませんが、先ほどご意見もいただいた、小学校が合併してしまうと、その周りにある産業が無くなります。お店が無くなります。高齢の方々のお話を聞いてみますと、子どもたちの声がしないと非常に寂しいということで、どんどんと衰退をしていきます。これは小学校でも中学校でも高校でも全く同じ現象になるんだろうと感じておりますので、そのところも含めてご協議をいただければと思います。

○斎藤委員

2つ県への質問も含めて、この地域の専門学科には山商や伊勢工業や明野、水産がありますが、当然人数が減っていく中で、今の学科そのものは、当然募集をしても最終的には人数が集まらない状況も出てくると思います。そんな中では、この地域に合った専門学科というものを考えることも必要ではないかと思えます。これまでの中でも今年は遷宮で伊勢が非常に活況を呈していますが、そういう「観光」というような部分や、あるいは、南勢志摩地域に合った専門学科の配置、これは水産を含めたらかなり地域性を反映していると思っておりますが、県はそういった学科の改編は考えているのかどうか。私は、それはある一定考えながら、こういう中でも色んな意見は反映をしたらいいと思っております。このことが1点です。

それから、総合学科についてです。県内に7つの総合学科の学校がありますが、これまで総合学科というものを推進してきて、その総合学科に対する評価を県はどのようにしているのか。そして、これからの方向をどのように考えてみえるのかということについて、意見と質問をさせていただきます。

○加藤推進監（事務局）

専門学科のあり方についてですが、これまで長く高校の学科のあり方を考えてきている中で、専門学科の拠点化ということも考えながら、小さい専門学科があっちこっちにあるより

も、一定、拠点化していくことも考えたりもしながら学科の改編を進めてきたということで、もちろん地域の就職状況や主産業の状況も踏まえながらつくってきたと思っています。したがって、今の学科のあり方はそういった経緯の中で設置されていると思っておりますが、さらにこういうようなところが必要ということがあれば、今おっしゃったようなご意見を踏まえながら、ぜひ、次の専門学科のワーキングの中でも地域の方々からもご意見をいただければと思っています。

総合学科につきましては、様々なメリットと課題もあると考えておりまして、当然これは子どもたちが自分自身で将来のあり方を考えながら、自分で選択科目を選んで興味、関心に応じた形の中で選んで自主的にやっていくところが非常に大きなメリットですので、県内でもいくつかそういう総合学科があり、それぞれ地域ごとに学校のあり方もいろいろです。人気のある総合学科があったり、キャリア教育に成果を挙げている総合学科があったりするというように考えていますが、一方で将来のことをよほど真剣に考えないと、あるいは、そういう働きかけなり仕掛けなり取組を充実していかないと、専門性も専門学科ほどは高めることが難しかったり、進路に十分結びつかなかつたりする場合があります。したがって、自分の生き方、あり方等をしっかり考えながら、それもそんなにゆっくりできませんので、入った段階で1年生を中心にしっかりそういうことがどこまでできるかということは、総合学科を進めていくうえでの課題と思っております。およそ通学できる圏内に1校、総合学科があるのが望ましいとは考えておりますので、数としては現在の数の増減は考えていない状況です。

○齋藤委員

どの学校も、活性化について随分書いていただいています。昨年度までも活性化のために、それぞれの学校はかなり取り組んでいただいていると思っています。

ただ、それぞれの学校で単独での活性化ということも、予算的な部分も含めてかなり制約をされるだろうと思っています。その中では、県もある程度、そのためにこの部分をきちっと措置するというあたりは、ぜひともしていただかないと、学校での取組だけでは限度があると思っていますので、よろしくをお願いします。

○松本会長

各学校での取組を重点的に支援するようなシステムを考えていただきたいというご意見だったと思います。

今後の協議では、専門学科検討ワーキングと鳥羽・志摩・度会地域検討ワーキングが設定されていますが、先ほどからの議論でもそうですが、これらは新しく切り離せるものではなく、当然専門学科も、鳥羽・志摩・度会地域にもありますので、場合によってはワーキング会議の相互の連絡をうまく取り合っていただけて進めていただくことをお願いしたいと思います。

おおよそ時間も予定の時間に迫ってまいりましたが、いかがでしょうか、この2つ目の協議内容について、ご意見大体いただきましたでしょうか。

○中北委員

適正配置・適正規模についてですが、最初の前のことにもなりますが、魅力化・活性化の部分でもそうですが、子どもたちの育ち、成長にとって何が一番良いかということで考える

視点が大事かと思いました。学校規模もどれぐらいが一番いいのかということも、子どもたちにとってどうか。1クラスの学校でいいのかとか、そういうことも大事だと思います。学校がその地域にある、ないも大事ですが、子どもたちが1クラスの学校で学んでいくことが、子どもたちにとっていいのかどうかという部分もすごく大事かと思えます。

それと、最初の魅力化や活性化の部分でも、地域連携もいろいろどの学校もしてもらっていると思います。いろいろさせていただきますが、例えば明野高校でもいろんな地域へ出させてもらって、年間何十回と子どもたちも一緒に行かせてもらっています。

そのときに大事なことは、子どもたちが地域の方とふれ合い、いろんなことを認めていただきながら、自分の自信につながっていくとか、子どもたちの成長につながっていくとか、そういう視点をすごく大事にしたいと思っています。それが、地域の活性化につながれば、もっと良いと思っていますし、それぞれの地域で学校にいろんなアプローチもかけていただいて、学校ができる部分もあるし、できない部分もあると思います。時期によっては、こんなイベントをやるのでと言っていたと思いますが、それが期末試験や文化祭やクラブの大会に引っ掛かっているようなこともあります。いろいろ言っていると、学校としても地域とのつながりもでき、子どもたちの教育にもつながっていきますので、いろんなところで何かがあれば、ぜひ、学校にご相談いただけたらありがたいと思いました。

先ほど松本会長もおっしゃっていただきましたが、本校もいろんなものを作っていますが、それが目的ではなく、それは教育の中でできてくるいろんな生産物です。中心になるのは子どもにとってどうなのかという部分だと思って聞かせてもらっていました。感想になって申し訳ないですが、そういう視点も大事かと思いましたので、一言お話させていただきました。

○松本会長

学校側の視点、特に子ども教育の視点といった重要な意見だったと思います。やはりこの問題は子どもたちの将来を見据えての議論であると。それで何が一番良いかということが共通の皆さんの願いだと思いますので、そこを再確認していただき、それを達成するための手段としてどういうことが考えられるかを、今後も協議していければと思っています。

予定の時刻も近づいてまいりました。この辺りでご意見いただいたかと思いますが、よろしいでしょうか。

今回、協議事項2つにつきまして重点的に協議いただきました。この内容をワーキング会議のほうに引き継いでいただき、さらに発展させていただいて、第3回の協議会を迎えたいと思います。

それでは、この後の進行を事務局にお渡しいたします。

○加藤推進監（事務局）

本日は、2つの議題の中で魅力化・特色化については、重ね重ねになりますが、地域といかにつないでいって、あるいは市町、県の行政、このあたりも関係していきながら、学校と地域の両方にとって活力ある活動ができていく視点が非常に大事だというご意見をいただいたと思っています。

また、2つ目の議題の県立高校の適正規模・適正配置もこれからワーキング会議での協議に入っていくということで、専門学科については、今の学科のあり方、今後の少子化も踏まえなければなりません。そんな中で地域として、あるいは人材育成、様々な観点から学科

のあり方がどうかということも精査する必要があるということや、あるいは、度会校舎等については、今後の学校の維持そのものも含めて、抜本的な改革も考える必要があるのではないかというご意見もいただいたかと思っています。このような意見をきちっと整理させていただき、ワーキングのほうにつなげていただき、2回のワーキング会議を経てこちらの全体の協議会で報告させていただき、ご議論いただければと思っていますので、どうぞよろしくをお願いします。

5 諸連絡

○事務局

第3回の協議会は、今までの協議と、今、推進監からの話にもありました2つのワーキング会議をそれぞれ2回開催して、協議した内容を踏まえ、当地域の中長期的な県立高校のあり方について、今年度のまとめにつながる協議を行っていただきたいと考えております。どうぞよろしくをお願いします。

ワーキング会議については、今、日程調整を行っており、10月の下旬、11月の下旬という形で2回、予定どおり行いたいと思っています。

それを受けて、第3回協議会は12月中旬ということで計画をさせていただいております。まだ、2ヶ月以上、先の話です。再度、会長、副会長に相談し、日程調整を後日、メールで行わせていただきたいと思っていますので、どうぞよろしくをお願いします。

もう1点、旅費の件ですが、協議会開催間際、あるいは少し遅れてご参加いただいた委員の机の上に、旅費に関する資料が置いてありますので、サイン又は押印をいただきご提出いただきますようお願いします。

事務局からは以上ですが、他、何かございますでしょうか。

これもちまして、平成25年度第2回伊勢志摩地域高等学校活性化推進協議会を閉会します。